

<研究報告>

重度重複障害者の動作を引き出すアプローチ —意識に着目した事例から—

近藤 尚也*

抄録：重度の重複障害（本論では知的障害と肢体不自由の重複）がある場合、その障害により動作・身体活動が制限されてしまうことが多いものの、わずかな動作・身体活動であってもその意味は大きい。生涯発達の観点でみたとき、教育や福祉として分けて考えるのではなく、共通したアプローチの中で動作・身体活動を獲得・拡大していくことは重要であり、そのためにも目標設定を含めた支援の意識化等が求められているといえる。そこで本論では、重度重複障害者の動作に着目し、動作を引き出していくアプローチの実践に関して、支援者を軸に意識のあり方と、動作発現との関係について事例を通して考察した。対象者はケースに「自分の力」を活用して参加してもらおうといった意識を持ち活動を実践していた。しかし「手を出しすぎない」「利用者自身で行ってもらおう」といった意識はあるものの、はじめは動作の発現には至っていなかった。具体的な身体へのアプローチ方法が意識されたところ、対象者の渡し方に変化が見られ、ケースの動作にも変化が見られた。動作を引き出すためには、具体的な方法を意識し、アプローチすることの必要性が示唆された。

キーワード：重度重複障害、動作、意識

I. はじめに

身体活動を伴う運動は、健康な骨状態の維持、筋肥大や筋力増加、呼吸循環系の体力の向上、肥満の予防などの効果があるとともに心理的側面にも寄与することが知られている（健康・生活科学委員会2011）。重度の重複障害（本論では知的障害と肢体不自由の重複）がある場合、その障害により動作・身体活動が制限されてしまうことが多いものの、わずかな動作・身体活動であってもその意味は大きい。

教育の視点として、特別支援学校学習指導要領では「自立活動」の授業が設定され、内容「身体の動き」の1つとして、「姿勢と運動・動作の基本的技能に関すること」が挙げられている。また、自立活動の指導に当たっては、「個々の児童又は生徒の障害の状態や発達の段階等の的確な把握に基づき、指導の目標及び指導内容を明確にし、個別の指導計画を作成」することが必要とされており、具体的な目標や指導内容が重要な要素の1つとなっている。

福祉の視点では、障害者の日常生活における活動を保障することは、高齢化や重度化に伴う課題への対応を進めていく（安井2008）と指摘されている。しかし、日常的な活動において動作は意識されることが少なく、その意識化や支援目的の明確化の必要性が指摘されている（近藤2012）

動作・身体活動を生涯発達の観点からみたとき、教育や福祉として分けて考えるのではなく、共通したアプローチの中で獲得・拡大していくことは重要であり、そのためにも目標設定を含めた支援の意識化等が求められているといえる。

そこで本論では、重度重複障害者の動作に着目し、動作を引き出していくアプローチの実践に関して、支援者を軸に意識のあり方と、動作発現との関係について事例を通して考察する。

II. 方法

1. 対象と活動の概要

日常的に活動実践を通じたアプローチを行っている通所事業所支援員1名（20代、女性、実践経験年数半年）を対象者とした。

*看護福祉学部臨床福祉学科社会福祉学講座

また、今回は対象者が関わる利用者（以下、ケース）1名との関わりについてデータ収集を行った。ケースは、重度重複障害者（20代、女性、脳性麻痺による四肢麻痺、発達年齢はKIDS乳幼児発達スケールタイプAで6か月）であった。

対象とする場面は、日中活動として行われているボーリングゲームとした。本活動はボール（直径30cmほどのゴムボール）でペットボトルのピン10本を倒す活動であった。ルールは通常のボーリングに準じて実施されたが、ボールを投げる位置などは参加者の身体状況等に合わせて変更していた。1回の活動の中で2~3ゲーム行った（1ゲーム最大2投）。活動では待機場所から打球場所へ移動し、ボールを受け取って投げるといった一連の動作が必要となる。今回は「ボールの受け渡し」場面の動作に焦点を当て、対象者の渡し方、ケースの受け取り方に着目した。

全4回の活動について、段階的な形で対象者へ動作の意識付けアプローチを行い、意識の変化を促した上で、対象者とケースの相互作用における動作の変化に着目した。

2. 映像データ

活動（ボーリングゲーム）について、「ボールの受け渡し」場面の動作に焦点を当て、対象者の渡し方、ケースの受け取り方に着目し記録した。（全4回分）。映像はデジタルビデオカメラJVC Everio GZ-HM250で記録し、その分析には行動コーディングシステムVer. 2.463（株式会社ディケイエイチ）を使用した。

3. アンケート調査

各回活動終了後に対象者へ活動でのケースの動作に対する意識について自記式アンケート調査を行い、その内容について質的に分析を行った。

4. 実施期間

本研究における全4回の活動実施期間は2012年10月中旬～11月中旬の約一カ月間であった。

5. 倫理的配慮

本研究を行うにあたり対象者へは、研究結果に影響が出ない範囲において研究内容を伝え、また、参加しない場合でも不利益がないことを口頭、文章にて伝えて承諾を得た。データ収集後、改めて研究の詳細を説明し研究の承諾を確認した。ケースへは、その障害特性により本人からの同意が難しいため、代理人（家族）に内容等の説明を行い、承諾を得た。加えて、対象者、ケースが所属している事業所に対しても説明を行い、承諾を得た。

Ⅲ. 結果

1. 活動実施と対象者への意識付け

対象者の意識と動作との関連を考察するため、対象者へ動作の意識付けアプローチを以下のように実施した。

1回目では特に意識化を図ることは行わず、通常通りの活動を実施してもらった。

2回目の活動は1週間後に実施した。活動実施前に活動でみられる動作について聞き取りを行い、動作のイメージ形成から意識化を図った。

3回目、4回目の活動は、さらに2週間後の同じ日に実施した。3回目では活動直前に口頭にてより多くの動作を発現させるよう意識付けを行い、4回目では、直前の口頭での意識付けに加え、腕の伸展がみられる渡し方などの具体例を提示した。

2. 映像データ

記録した映像から「ボールの受け渡し」場面について、特にケースの腕の伸展に着目して対象者のボールを渡す動作とケースの受け取る動作を見たところ、1回目（全5投）については、身体に近い位置（ケースの体に密着させるように）でボールを渡していた。ケースはそのまま抱える形で受け取っていた。また、一度渡そうとする前に、ケースがボールへ手を伸ばすことがあったが、渡し方に変化はなかった。

2回目（全4投）についても1回目と同様の渡し方であった。また、対象者が渡そうとする前に、ケースがボールを取りに行く様子が見られた（腕の伸展はなかった）。

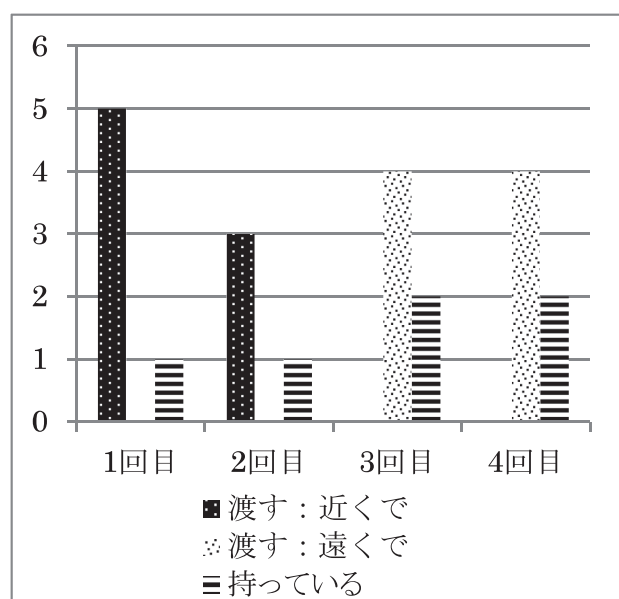


図1 対象者の渡し方（提示する距離）

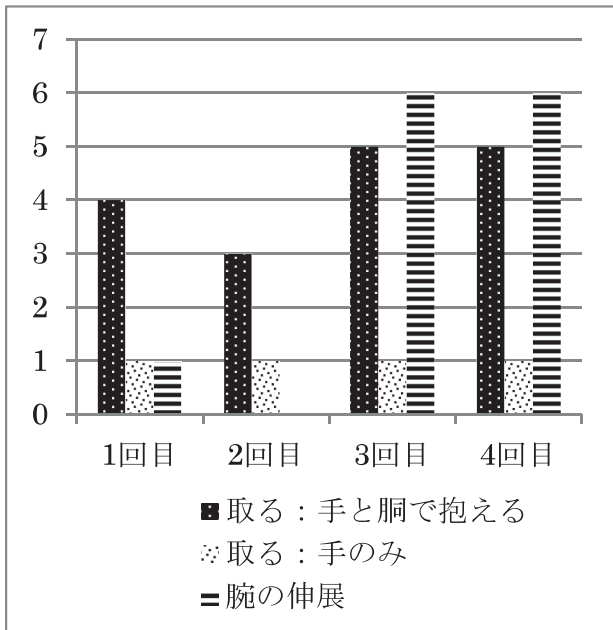


図2 ケースの動作（受け取りと腕の伸展）

3回目（全6投）は、対象者がケースの身体に遠い位置（腕を伸展しないと届かない位置）にボールを提示し、ケースが腕を伸展して受け取る場面が多く見られた。

4回目（全6回）も、対象者が遠い位置でボールを渡す場面が多く、すべてでケースが腕を伸展させていた。（図1，図2）

3. アンケート調査

動作への意識についてアンケート用紙に記述してもらった。なお、3回目と4回目は同日での実施となったため、アンケートについては2回分を合わせて回答してもらい、追加項目として、3回目と4回目の意識の違いを記述してもらった。

回答の概要は以下の通りである。

< 1回目 >

- ・利用者自身に活動に参加してもらえるよう自身の力（できる部分）を活用できるのかを考えた。
- ・職員が手を出しすぎない。

< 2回目 >

- ・動作をできる限り利用者自身にやってもらうことを意識。
- ・声かけだけではなく、触れてもらったり、叩いて音を出すことで、自分からボールを持ってもらえるよう意識した。

< 3，4回目 >

- ・利用者が自身で活動に参加できるよう、体勢や向きを考えて支援に入るようにした。
- ・投げるといった一つの動作だけに意識を向けるのではなく、それを行うために必要な動作も意識。

< 3回目との違いについて >

- ・利用者に多くの動作をしてもらえるようにということ意識。
- ・投げるといった動作以外の動作にも意識してもらうように支援しなくてはいけないと感じた。

IV. 考察

対象者はケースに「自分の力」を活用して参加してもらおうといった意識を持ち活動を実践していた。しかしながら、「手を出しすぎない」「利用者自身で行ってもらおう」といった意識はあるものの、ボールの受け渡し場面の腕の伸展に着目したところ、1回目では身体に密着させてボールを渡しており、ケースは腕を伸展しなかった。事前に活動での動作イメージを意識してもらう取り組みを行った2回目は、興味を引き出すことが意識され、動作へのアプローチにおける意識は強くなったが、ケースの動作について変化は見られなかった。

3回目では、「身体の向きや体勢を考える」といった、より具体的に動作を意識した内容が挙げられた。ボールを提示する距離が遠くなるという変化が見られ、ケースの腕の伸展が発現していた。具体的な方法を意識したアプローチが関連していると考えられる。4回目でも同様に腕の伸展が見られ、さらに、活動の中心となる「投げる」以外の動作への意識化が挙げられていた。

ケースが「自分の力」で行う点を意識することは重要であるが、意識とともに具体的な「距離の活用」などのアプローチ方法が展開されることで、実際の動作の発現につながっていた。動作を引き出すためには、具体的な方法を意識し、アプローチすることの必要性が示唆された。

V. まとめ

動作を引き出すアプローチのために支援者の意識において、漠然としたイメージだけではなく、より具体的な方法を意識することの必要性が示唆された。

徳永（2014）は教育において「どのような状況で、またはどう働きかけたら、このような行動は生起し、このような行動は難しい」など、発達の程度や障害の特性を反映した具体的な行動を理解して、目標を設定していくことを示しており、動作・身体活動に着目した教育・支援も同様に具体的な場面を意識することが必要であると考えられる。今回の事例では、提示する距離を変化させるアプローチが行われることで、ケースの動作が引き出されていた。指導や支援を行う中で、一つ一つの動作を意識して、「より動きたくなる」環境となるようアプローチすることは、成長や成熟に向けた関わりとして生涯発達の視点からも求められるであろう。

重度重複障害者の動作や身体活動に関する研究はまだ少なく、今後も教育や福祉等における様々な場面について、事例からより多くの実態を明らかにし、指導や支援に関する情報を蓄積していく中で共通する、動作を引き出すアプローチ方法について検討していくことが必要である。

謝辞

本研究に取り組むにあたり、ご協力頂きました皆様に心より感謝申し上げます。

文献

堀田千絵, 伊藤一雄, 八田武志 (2014) : 障害を有する児童・生徒のキャリア発達を促す教育課程及び指導法の構築－発達障害, 病弱, 肢体不自由, 重症心身障害者に対する特別支援学校の進路指導実践から－, 人間環境学研究 第12巻2号, 135－143

今枝史雄, 菅野敦 (2010) : 知的障害者の成人期における生涯学習支援について－生涯学習に関する研究の動向と実態の調査から－, 東京学芸大学紀要 総合教育科学系Ⅱ 61, 121－134

木村牧生, 安井友康 (2015) : 重症心身障害児(者)の身体活動を測定する試み－複数の身体活動量計を用いて－, 北海道教育大学紀要(教育科学編) 第66巻第1号, 11－21

近藤尚也, 安井友康 (2013) : 重度心身障害者の生活介護事業における動作について－活動支援者の記録・聞き取りから－, 北海道教育大学紀要(教育科学編), 63(2), 285－295

近藤尚也 (2015) : 重症心身障害者の動作をとらえる試み－上肢に着目して－, 北海道医療大学看護福祉学部紀要22, 39－46

文部科学省 (2009) : 特別支援学校小学部・中学部学習指導要領

文部科学省 (2009) : 特別支援学校学習指導要領解説自立活動編(幼稚部・小学部・中学部・高等部)

村上祐介 (2013) : 自閉症スペクトラム障害児の運動特性と指導法に関する研究動向, 筑波大学体育学紀要 36, 5－14

日本学術会議 健康・生活科学委員会 健康・スポーツ科学分科会 (2011) : 子どもにおける運動・スポーツの効果 子どもを元気にする運動・スポーツの適正実施のための基本指針, 日本学術会議

野崎義和, 川住隆一 (2013) : 超重症児該当児童生徒に対する教育の実態に関する調査研究－肢体不自由・病弱特別支援学校における指導の実際－, 特殊教育学研究51(2), 115－124

岡澤慎一 (2012) : 超重症児への教育的対応に関する研究動向, 特殊教育学研究50(2), 205－214

田地野浩文 (2009) : 重度・重複障害児の興味の開発と自発的な行動を促すための工夫－感覚運動あそびを通して興味の対象を広げ, 自らかかわろうとする意思の表出を高める試み－, 教育実践研究19, 207－212

徳永豊編著 (2014) : 障害の重い子どもの目標設定ガイド 授業における「学習到達度チェックリスト」の活用, 慶應義塾大学出版会

安井友康 (2008) : 育ちによりそう, 重度・高齢化への対応, 七木田敦・安井友康編著 (2008) : 事例で学び, 実践にいかす障害福祉, 保育出版社, 54－55

Approach to Motion for A Person with Severe Motor and Intellectual Disabilities -A Case Focused on Consciousness -

Naoya KONDO

Abstract : Person with severe motor and intellectual disabilities is restricted his/her motions and physical activities. However, it is meaning for him/her to have motions and physical activities. From the perspective of lifelong development, it is important to acquire and expand motions and physical activities at education and welfare. For that aware of support including goal setting is required. In this paper, by focusing on the motion of person with severe motor and intellectual disabilities, we examined the relationship between supporter's consciousness and client's motions expression. The supporter had practiced activities with awareness that his/her would participate by utilizing "client's strength". Although there is supporter's consciousness such as "do not put out too much support" or "do it by client", the motion has not been expressed at the beginning. When a specific method of approach to the body was conscious, how to pass from supporter was changed, and the motions of client also changed. In order to derive motions, it was suggested that supporter needs to be conscious about specific methods.

Keywords : person with severe motor and intellectual disabilities, motion, consciousness